



## 第6章 平成25年度科学研究費助成金・基盤研究(S) : 「大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした地域 歴史資料学の構築」の研究支援

吉川, 圭太

---

**(Citation)**

歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 12(平成25年度事業報告書):35-36

**(Issue Date)**

2014-03-31

**(Resource Type)**

report part

**(Version)**

Version of Record

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005561>



学大学院人文学研究科地域連携センター編『「地域歴史遺産」の可能性』（岩田書院）が2013年7月に出版され、来年度のリレー講義からテキストとして使用する予定である。（文責・坂江渉）

**(2) 地域歴史遺産活用演習と(学部授業名は「地域歴史遺産活用演習A」、大学院文学研究科は「地域歴史遺産活用演習」、人文学研究科は「地域歴史遺産活用企画演習」)**

本演習は、地域歴史遺産の保全・活用を実践しうる地域リーダーの養成を目的としている。特に文献史料の取り扱い、整理、目録作成、解読をおこなう基礎的な能力を実践的に習得することを目的とした演習として、夏期と冬期に2回にわたり事前指導講義と合宿形式(集中講義)でおこなわれた。授業の履修者のほか、日本史研究室の院生・学生、大学附属図書館職員などの希望者も参加した。

**① 夏期**

2013年9月5日～7日にかけて、神戸大学篠山フィールドステーションにておこなわれた。篠山市日置地区で発見された中西家文書を用い、整理と目録カードの作成方法を学びつつ、内容を解読した。最終日には、班ごとに整理した史料の内容を紹介し議論した。

**② 冬期**

2014年2月20日～21日にかけて、三木市旧玉置家住宅にておこなわれた。三木市小林新田村の西村家文書を用い、整理と目録カードの作成方法を学びつつ、内容を解読した。最終日には、班ごとに整理した史料の内容を紹介し議論した。

(文責・板垣貴志)

## 地歴科教育論D

「資質の高い教員養成推進プログラム」として採択され、2006～2007年度に実施した「地域文化を担う地歴科高校教員の養成」以来、現在まで継続してきている兵庫県立御影高校との連携事業

を、今年度も引き続き実施した。センター関係教員が指導する「地歴科教育論D」では、御影高校総合人文コースの課題学習を指導することを通じて、地域文化を担う社会科・地歴科教員の実践力を身に付ける授業を行った。今年度は「神社」「だんじり」「布引」「いかなご」「ポートライナー」「甲子園」「スイーツ」「ファッション」の8つのテーマに分かれて研究を行い、このうち「布引」「甲子園」「ポートライナー」の3つの研究が、関西学院大学総合政策学部主催のリサーチフェアに参加した。

また、受講生の中から、2月4日には世界史2人、日本史1人、18日には世界史2人、日本史1人が、御影高校2年生のクラスでそれぞれ実習を行い、同校教員の指導と講評を受けた。日本人の自然観の変化から高度経済成長期の公害問題にアプローチする授業(日本史学3年・竹内慶子)、アラビア語を紹介しながらサファビー朝の隆盛を説明する授業(東洋史学2年・川勝沙也香・岡本有盛)、明治期の府県再設置運動から近代日本における自治体の成り立ちとその矛盾に迫る授業(日本史学3年・津熊友輔)ジャンヌ・ダルクのイメージ変化を捉えて近代国民国家の成立過程を論じる授業(西洋史学3年・石野康平)、現在の移民問題からフランス革命の「負の遺産」を見つめ直す授業(西洋史学3年・宮崎雄史郎)など、意欲的でユニークな授業実践が行われた。（文責・河島真）

### — 第6章 —

平成25年度科学研究費補助金・基盤研究(S)  
「大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした地域歴史資料学の構築」の研究支援

2009年4月からスタートした上記テーマの科学研究は、今年度で最終年度となる5年目を迎えた。今年度はこれまで4年間の基礎研究、ならびに東日本大震災に際して進められた歴史資料保全活動

から得られた知見を基礎として、新たな地域歴史資料学の構築に向けて各研究を展開し、その成果を奥村弘編『歴史文化を大災害から守る——地域歴史資料学の構築』（東京大学出版会、2014年1月）にまとめた。

今年度は、フォーラム及び国際シンポジウムを2度開催した。

災害資料フォーラム「阪神・淡路大震災から東日本大震災へ」（2013年10月20日、神戸大学瀧川記念学術交流会館）では、地域歴史資料学の構築において被災歴史資料保全研究と両輪をなす震災資料の保存・活用研究について、阪神・淡路大震災以降の震災資料保全や東日本大震災被災地での現状と課題などについて報告があった。その上で、震災資料の収集・保存・利活用のあり方や地域歴史文化のなかでいかに災害の記憶を継承し、災害文化を形成するかなどについて議論がなされた。なお、このフォーラムは人文学研究科地域連携センターとの共催行事であった。

地域歴史資料国際シンポジウム「地域の歴史資料をとりまく世界の諸相——史料保存を中心に考える」（2013年12月1日、神戸大学梅田インテリジェントラボラトリ）では、歴史資料を地域で残し続けてきた人々とその活動に焦点をあて、史料保存に関する日本及び海外の歴史的経緯や現状などについて議論がなされた。

地域歴史資料学の研究成果としては、主催の研究会を3度開催し、また外部の研究会との共催を2度行った。主催の研究会内容は、以下のとおりである。

- ・第17回地域歴史資料学研究会「資料保全関係文献翻訳研究会」（2013年6月6日、神戸大学文学部）、
- ・第19回地域歴史資料学研究会「『歴史文化を大災害から守る』書評会」（2014年3月1日、神戸大学文学部）
- ・平成24年度総括研究会（2013年3月2日）

共催の研究会は、大阪歴史科学協議会例会「被災地における地域歴史資料の保存——茨城史料ネットのとりくみから」（主催・大阪歴史科学協

議会、神戸大学梅田インテリジェントラボラトリ）、「第3回被災地図書館との情報交換会（第14回阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会）」（2014年2月18日、本科研第18回地域歴史資料学研究会を兼ねる。人と防災未来センター）である。

国際的な情報発信として、資料保全関係文献の翻訳を進めるとともに、9月には奥村弘・内田俊秀・板垣貴志がローマ、ラクイラを訪れ、イタリア国立ローマ中央修復研究所(ISCR)において「イタリア全土文化財危険度予測システム」を見学し、現地のアーキビスト・歴史研究者等と意見交換するなど、研究課題の遂行の上で多くの示唆を得た。

東日本大震災の発生をうけて、本科研では分担者・協力者による被災歴史資料調査・保全（宮城県、茨城県などの被災資料）を支援しているが、本年度は2013年4月に発生した淡路島地震において、地域連携センター・歴史資料ネットワークと協力して現地での被災状況調査を行った（4月16～17日）。また、阪神・淡路大震災や中越地震において蓄積された震災資料論を踏まえ、東日本大震災の震災資料に関する現地調査（宮城県岩沼市・石巻市など）を行い、各種研究会で関係者などと情報交換し、今後の課題について議論した。

そのほかの研究活動としては、東日本大震災で被害を受けた歴史資料を効果的に保全していくための経験を積み、そこから析出された方法論を研究に反映させていくために、被災歴史資料をとりまく状況についてのデータ収集を継続し、中間的なまとめを行った。また、阪神・淡路大震災時の資料保全活動の記録資料の整理を進め、劣化が懸念されるフィルム写真や音声録音テープなどについては媒体変換を行った。そのほか、市民と協同した地域歴史資料の保全・活用実践事例の調査（兵庫県朝来市・三木市・篠山市）などの研究を展開した。（文責・吉川圭太）